

授業科目名・形態	助産学実習Ⅰ 実習	必修・選択の別	選択	単位数	5
科目担当者氏名	工藤 優子・岩間 薫・	実務経験の有無	有	開講期	4年前期

【授業の主題】

妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期にある対象の身体的・心理的・社会的側面、地域や家族関係から多面的に情報を収集し、立案した計画に沿って助産過程を実践する。さらに提供した分娩介助およびケアを客観的に振り返り、自己の課題を明確にして次の介助とケアに活かし、学びを深める。

また、母子保健医療チームの一員としての助産師の役割を理解し、看護者としての必要な倫理的義務や責任について学ぶ。

【到達目標】

1. 妊娠期・分娩期・産褥期および早期新生児期の助産過程を実践できる。
2. 継続事例の受け持ちを通して、妊娠期から産褥・新生児期まで継続した個別的なケアを提供できる。
3. 提供した分娩介助およびケアを客観的に振り返り、自己の課題を明確にして次のケア提供に活かすことができる。
4. 専門職としての役割・責務を認識した行動を学ぶ。

【授業計画・内容】

1. 産婦を受け持ち、助産過程を実践する。正常分娩の介助を10例程度実施する。(継続受け持ち事例を含む)
 2. 継続事例として、妊娠期から産褥1ヶ月まで受け持つ。
 - 1) 継続事例の妊娠期および産褥期の外来における、健康診査と保健指導を実施する。
 - 2) 継続事例の分娩開始・入院から受け持ち、分娩各期の観察および分娩介助を含む助産ケア・新生児の出生直後のケア・健康診査を実施する。退院まで継続事例母子を受け持ち、助産ケア・保健指導を実施する。
 - 3) 受け持ちの産婦が異常に移行した場合は、実習指導者の指示に従い直接的なケアについて見学を通して学ぶ。
 - 4) 実習内容は実習指導者と相談の上で決定し、実習計画の発表・調整・報告を行いながら、主体的にのぞむ。
 - 5) 評価表を用いて、各段階における到達目標の評価を行い、自己の課題と目標を明確にする。
- *その他の計画・内容の詳細は、別途実習要項を参照。

【授業実施方法】

臨地実習

【授業準備】

これまでの学習内容、および教科書・資料・参考文献を復習し、分娩介助技術をマスターしておくこと。

【主な関連する科目】

助産学概論、基礎助産学、助産診断・技術学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、助産管理論

【教科書等】

助産学講座1 助産学概論～助産学講座8 医学書院、各授業で配布した資料など。

【参考文献】

日本助産診断・実践研究会：実践 マタニティ診断第4版 医学書院
北川真理子、内山和美編：今日の助産 改訂第3版 南江堂
武谷雄二他監修：プリンシプル産婦人科学2 産科編第3版 MEDICAL VIEW
日本産婦人科学会/日本産婦人科医会編集・監修：産婦人科診療ガイドライン 産科編2017 日本産婦人科学会
その他は、適宜提示する。

【成績評価方法】

実習評価40% 実習記録40% 事前学習10% 実習への取り組み等10%とし、統合的に評価する

【実務経験及び実務を活かした授業内容】

実務経験あり。

助産師としての実務経験を踏まえ、実際の臨床における状況を重視し、受け持ち対象に対する助産ケアの理解が深まる様に指導している。

【学生へのメッセージ】

これまで学習した全ての知識・技術を活用して、助産過程を実践する大切な実習です。24時間体制の実習になりますから、実習での学習のほかにも自己の体調管理に留意し、体力・気力の維持を図りましょう。